

# インパクション

bimonthly

IMPACTION 1994

# 差別との向き合方

特集

「私は差別していない」たって?  
崎山政毅  
「糾弾される側の論理」  
伊藤公雄  
「差別と向きあう」  
瀧本昌久・木ト一郎・富山一郎

座談会

「私たちがことばを変える  
—米国にみる差別とのポジティブな向き合い方—」  
武田春子

「私たちがことばを変える  
—米国にみる差別とのポジティブな向き合い方—」  
泥澤の一石

浜田寿美男  
—甲山事件の二〇年—

差別を「観に行く」  
杉村昌昭



マリア・アローサ・ダ・ラ・フランセ  
もうちの発展をめざして  
環境人口戦争ミニマム

アーヴィング・カーネギー

トバハナ出版会社 著者著文庫本編2-30-14 著者元 トバハナ出版

トバハナ出版会社 1994年6月10日発行

## 戦争と放送

竹山昭子著

概要：本書は、戦争と放送の歴史の中で、戦勝した日本が世界にどのように影響を与えたかについて検証。題高評。●1100円

史判が語る戦争と情報戦作曲ロバサンダ  
露木まさひろ著 日本国を絶版取材して、占領軍の戦争責任について検証。題高評。●1100円

多田茂樹著 石原、鹿野、菅の戦中・戦後の精神史を辿り、小辻子揚子編 ケトル人の間に口承で伝わる宇宙の広がりを紹介。新刊。●1100円

石原吉郎・鹿野武・菅孝治  
小辻子揚子編 ケトル人の間に口承で伝わる宇宙の広がりを紹介。新刊。●1100円

山上正木郎著 自らの生業を下さし伝記。新刊。●1100円  
山上正木郎著 自らの生業を下さし伝記。新刊。●1100円

内なるゲーリヤ抑留体験  
ケルト幻想民話集  
ナホレオノボナバトル妖精民話集

著者 文字を描なづけたアーティストが残した海秘密などで  
美しい螺旋文様の遺品、道頓堀ケルトの精神世界を彷彿とさせる風景。

集  
ヨーロッパ先住民族の神祕と謎

ALF - SLD  
Sez. 4  
Sottosez. 4  
Serie 4  
Sottos. 1  
Unità 14  
PUV 55

## ケルト人

日文訳・定価5800円

代ケルトの社会、國家として宗教の残像を見た。



## 社会思想社

(定期発行)

〒113 東京都文京区本郷3-25 振替東京6-71812 Tel 03-3813-8101 (代表)

好評連載▼文学非力説の高見順(下)=池田浩士▼ジャパン・マナーとエコフェミニズムと=加納  
好評連載▼「書籍連載」計7回、毎月論議への坦率=天野重一▼インターえい=鈴川哲夫

定価1,200円(本体1,165円)

ISBN4-7554-7091-9 C1036 P1200E

●Mariarosa Dalla Costa

# もう一つの発展をめざして

環境・人口・戦争とフェミニズム

マリアローザ・ダラ・コスタ

伊田久美子（インタビュー）

1、来日されたのはこれが初めてですが、日本の印象はいかがですか。

今回の日本への研修旅行では、基本的に女性の状況をめぐる諸問題だけでなく環境と戦争をめぐる課題に取り組む女性たちとの会談が予定されていました。ですから日本についての全般的印象以上に、こうした女性たちとの会談に関するきわめて明確な印象をもつています。

日本についての全般的印象としては、人々が非常に多く働くことに衝撃を受けました。また賃金が低いので、もうひとつこの仕事で補わなければならぬこともあると聞きました。

そしてまだ私が出会った人々の知識（学識、教養）の高さに、そして——しかしあそらくこれは全般的なことなんでした

ようが、——おそらく初めて耳にしたであらう様々な議論の理解の速さに感銘を受けました。

当然この国の科学技術の水準の高さにも驚きました。しかし日常生活には過度の科学技術が溢れ、生活環境にはあまりにも多くのセメントが目につきます。それに東京では、建物が高すぎます。人間というものは、自然や樹木、生き物の存在する環境、建物がセメントの山のようにのしかかってくるようななどことは異なる環境の中で生きることを必要としている私は思います。おそらくいつか、科学技術の到達水準がさらに高まり、今とは異なる環境や生活の概念が主張されることによって、東京を別の方法で再建することが可能になる日が来るでしょう。

イタリアにおいても、建造物の中には、壊され、違う方法で建て直されなければならないものもあると思います。あるいは緑を増やし、草地の中を猫がうろついたりもできるように、その場所にはもう何も建設しないようすべき場合もあります。バドヴァアでは、町を流れる川に、アヒル、白鳥、ガチョウやその他の生き物を増やしてきました。人々はそれを眺めに行き、エサをもつて行き、そうした関係の中で、心の安らぎ、瞑想の時を見出し、自らが自然の一部であることを感じ、自然を通じて生きるエネルギーを回復するのです。

2、今回の旅行の目的は、環境問題や人口問題、戦争の問題についての議論を深めることでしたが、これらの問題に関するあなたの意見を簡単に説明してください。

まず第一に日本における人口問題とは、出生率の低下の問題ですが、これはイタリアではもっと深刻であり、今日すべての先進諸国に共通の問題です。しかし、四月九日に上智大学で行われたシンポジウムで私が述べたように、出生率の低下は、現在の発展が人口に対して引き起こした影響の非常に重要な指標であると思います。それは、すなわち自らと次の世代を再生産することの不可能、そしてまた欲望の欠如というものです。人間のエネルギーは——これは東京ではさわめて顕著ですが、——商品の生産とサービスに過度に吸収され

てしまい、人間自身の、生命の生産／再生産のためのエネルギーが残っていないのです。これは私自身が、そして私が七〇年代の初めから参加してきたフェミニズムのグループが解釈を加えてきた根本的課題です。

その解釈というのは、出産の拒否は、歴史上のある時点から、女性が男性への経済的依存に母性で報いること、あるいは二重労働（家での無償労働と外での有償労働）の拒否であったといふものです。すなわち母性において、女性のおかれただく労働の資本主義的性別分担によって労働力再生産労働を一義的に割り当てられている）賃金経済の中での無給の労働者という状況の耐えられなさが爆発するのです。育児は家庭事労働の途方もない増大としてあらわれ、女性の人生のなかで、きわめて強力な拘束力を發揮します。それは彼女が家庭の外で就労する可能性、引き受けることの可能な職種を制限します。

そのために、既に七〇年代初頭において、私たちは家事労働への賃金と、すべての男女の労働時間の思い切った縮減の要求を進めてきました。それらは今日、今まで以上に差し迫った要求であると私は思います。女性が外へ働きに出す家族に専念するとしても、あるいはひとりで子供を育てているとしても、彼女の経済的自立は保証されなければなりません。これが女性の外での労働と同じ問題であることを考慮するな

らば、議会に参加している女性たちは基本的議論や討論を引き起こして、家事労働あるいは他人の世話をする労働の報酬を規定する法律の制定に真剣に取り組まなくてはならないでしょう。なぜなら女性はいかなる選択をも強要されてはならないからです。

この提案が行われる方法はたくさんあります。だからこそ広範な議論を引き起こす価値があるのです。ともあれ先進資本主義諸国はかなり以前から母親への様々な形態の手当を制度化してきました。しかしこの経済的支持は確実なものでなくではありません。さもなくば女性にとっての新しい生活様式が開かれることがありません。

また私が強調しておきたいのは、それと同時に、すべての人々の労働時間が思い切って短縮されなければならぬということです。この一つが、私たちの現在の発展の様式の重要な変革を構成し、世界の多くの地域で、北で、南で、そして東で、別の発展を望む人々の声と行動があります強く感じられる今日、最初の重要な一步となるでしょう。

しかし人間の再生産エネルギーの領域で生じた荒廃は、私が自然の「再生産力」と呼ぶ力に全般的に生じた荒廃と同じものです。なぜなら人間もその一部であるエコ・システムはバランスの問題のみならず、自然が持つ再生産力による生命の絶え間ない生産—再生産の問題をも形成しているからです。

このバランスと力の破壊は、とくに環境汚染の観点から私たちが直面してきたもうひとつの大きな課題でした。この領域に関しては、他の国々と同様に、日本においても女性の参加が著しく、女性の運動や団体が、地域的なイニシアチブであつても地球規模のアプローチによって、実践や教育の分野で活動しているのを私は目の当たりにしましたが、これは偶然ではありません。この分析に関して、最新の分析において、私は自然、そして人間の基本的要求—その中には科学技術に媒介された関係だけでなく、時間、付き合い、肉体的接觸、セクシユアリティへの要求が当然含まれます—を尊重する別の発展へと向かう必要があることを主張しています。

しかし、もうひとつの発展へと向かうこの道を建設するためには、意見を聞いてもらわねばならないようにすること、経済、科学技術、政治的表現の領域に問わるべき重要な決定の際に、大きな影響を及ぼすことが必要です。

もうひとつの非常に重要な課題は、戦争の問題で、とくに広島と沖縄で取り上げられました。私は、現在の発展は、戦争そのものを生み出すのみならず、市民生活と文化的軍国化をエスカレートさせていくという意味においても、ますます戦争生産的になっており、世界的レベルで大規模に支配される暴力の一形態をあらわしている、と主張しました。こ

の暴力は、発展そのものが雇用を削減し、失業を増し、労働の不安定性を増し、とりわけ第三世界においては、貢労労働の位置とは異なる土地や水のような、生存の基盤である他の資源をも取り上げて、ますます貧困に陥らせている人々に対して向けられているのです。

同時に戦争は、過剰であると判断される人口、あるいは資本の投下の水準と形態に相応しく訓練されとはいえない人口を量的に減らし、その交渉力を低下させます。ニュース番組による現実の情報、あるいは、——たとえばテレビによる映画の上映によって、——私たちに絶えず送られてくる暴力と恐怖は、——イタリアではそれはもはや発作的レベルに達していると思われます——同様に社会的分配の機能を果たしていく。なぜなら人々の間で憂鬱や恐慌状態が決定的になると、

生命エネルギーが低下していき（戦争の絶え間ないイメージは未来を想像する可能性を奪い去ります。想像の可能性なくして人は生命力を維持できません）。それとともに個人人の交渉力も低下するからです。

世界で武器と麻薬の取り引きがますます拡大していることは、まぎれもない事実です。こうした取り引きは常に巨大な利益の源となる一方、さらに広範な人々を支配する破壊的形態の構築に力を貸しているのです。さらに、戦争文化は暴力を誇揚し、そのため戦争とその文化の第一の犠牲者である女性に対する暴力の絶え間ない増大に手を貸すことになるということは偶然ではありません。私たちはこのことを忘れてはならないと思います。

### 3 ハロ年代以後のイタリアにおける女性をめぐる状況ヒエミニアズム運動の状況はどうなものですか。

ハロ年代には、マルクス主義の遺産のいかなる痕跡をも消し去るだけなく、小さなグループや個人の努力は別にしてのことがですが、あらゆる討論の場から現在の生産の方法、したがって現在の発展の大いなる矛盾をめぐる議論を放逐するような文化が支配的でした。私は原初的蓄積期としてマルクスが資本論で分析した資本主義的蓄積の基礎的局面の説明の進展の一部に寄与し続けた教少ない大学教員のひとりである



マリアローザ・ダラ・コスタ  
Maria Rosaria Dalla Costa生まれ。1949年、イタリア、トレヴィーゾ生れ。具体的な形態と労働力を重視する労働者と知られる基金の女性として、家事労働を最も最初の編集者として定義した。本年4月、国際交流基金の女性としてニコラスから講演活動家を招いたが、その一人として州から研究者栄田日出じ。小池から主要論文を集めている。

と思つています。

それは今日なお形態は様々であつても、同じ意味をもつて  
いる巨大な作用の絶え間ない開始によつて、世界に存在し続  
けている局面です。この時期の分析は私が関わる領域のフェ  
ミニズム的分析について基本的要素となつています。私の同  
僚である何かのフェミニスト研究者は、「資本論」の中で  
分析されたものを、その時期に生じた、資本主義における女  
性的アイデンティティ形成の基礎となる他のアロセス——  
たとえば魔女狩りのような——の分析によつて補完したから  
です。

しかし八〇年代のフェミニストの議論の大部分は、この時  
代を特徴づけた抑圧／正常化の過程で押し潰されてきました。  
私の見解では、湾岸戦争には、なによりもます戦争とその  
意味という重大な問題をめぐる議論を再開する効果がありま  
した。そしてこれは女性の注目を集め大きなテーマとなり、  
政治的イニシアチィブの領域となつたのです。残念ながら、  
湾岸戦争に続く時期は私たちの今日の現実である戦争のエス  
カレーションを示しています。旧エゴスラヴィアにおける  
戦争は目下のところ、やはり女性の多くのイニシアチィブの  
領域となつています。また環境破壊の問題も、発展と人間—  
自然の関係の重大な問題、何をどのように、どんな人間関係  
の中で生産すべきかに関する討論の再開に力を貸しました。

しかしフェミニズム運動はたしかに七〇年代の勢いをもつ  
てはいません。むしろ、当時の分析や女性たちのネットワー  
クの遺産が今も残っていると言るべきかもしれません。当時  
活動していたいくつかのグループが、より若い女性たちの登  
場によつてイニシアチィブを作り出しているのです。

暴力の問題も、たとえばいわゆる「バラ色の電話」すな  
わち女性が救援を求めるためにかけることのできる電話を備  
えた、暴力を受けた女性のためのセンターのような、大規模  
なイニシアチィブの登場を可能にしました。

しかし私は、イタリアは今は、長い課題をめぐる議論  
が再開する新しい局面のはんの始まりにあるのだと思います。  
いっぽう何年から形成され文化的科学的討論の場にも登  
場する、フェミニストたちの国際的ネットワークの中で展開  
されている議論は、より活潑であるように思われます。その  
ネットワークは、非常に重要な分析や情報を伝達し、頭著な  
イニシアチィブを発揮しています。私自身も、七〇年代から  
一緒に仕事をしてきたフェミニストたち、そしてもつと後に  
なつてから知り合ったフェミニストたちとともに、その中で  
活動しています。これらのネットワークの中には、南北関係、  
東西関係、そして器質買賣から遺伝学的操作、戦争、人間と  
環境の破壊にいたる、今日人類を悩ませるあらゆる重大な問  
題への大きな注目があります。

4、「家事労働」とならぬ七〇年代のフェミニズムの重要な発見は、  
資本だけでなく男性自身が女性を直接に支配し擇取する精神的物質  
的関係としての「家父長制」であると言われています。この「家父  
長制」に関するあなたの見解で、イタリアでなされた議論——もし  
なされたならば——についてお話し下さい。

「家父長制」に関する議論はイタリアでの運動の初期、つ  
まり七〇年代初頭には活発でしたが、その後多くの信奉者を  
えることはありませんでした。七〇年代の初期には、それは、  
東の国々の現実の社会主義の経験や、国家資本主義としての  
経済形態の解釈への批判が存在していました。同様にマルク  
ス主義の遺産の解釈におけるさまざまな進展がなされました  
が、その中でもっとも重要なのが、他でもなく「労働時間  
の思い切った短縮の要求をもたらした」「労働の拒否」と、  
労働者層による「社会的富の奪還」の理論でした。それは資  
本主義の歴史全体を通じて労働者の（そして私たちが述べた  
ように主婦の）労働によって形成された富の力をすべての人々  
のために奪還するということでした。

そのころ市民のための無料の、あるいは安価な、もっと広  
範で質のよいサービスシステムが要求されるだけでなく、所  
得保障の要求が、討論の中心となつたのは、偶然ではありません。  
これらの課題をめぐる闘争は、社会的状況の中でます  
ます拡大していました。そして、そうした情況のなかで、  
私たちが無償の家事労働と、その資本主義的発展における位  
置づけについての分析を提唱し、家事労働への賃金（もちろん、  
それとともに労働時間の大幅短縮と安価で質のよいサ  
ービスシステム）を要求したのは偶然ではありません。

この理論的実践的企ては体制内左翼に典型的な「労働イ  
デオロギー」に対する根本的な分歧点を形成しました。体制内  
左翼は女性の問題に関しては、古典的マルクス主義の用語で、  
唯一の解放の形態として、女性たちに外へ働きに出ることを



グラ・コスクと伊田久美子両氏(4月8日、京王プラザにて)

提案し、主婦の地位を「後進性」とみなしていました。

イタリアでは、当時からフェミニストの議論は総体的に家事労働への賃金要求が焦点となっていました。この要るために賛成か、反対か、私たちが望むだけの賃金を手に入れるため、そして同時に私たちの闘争を通じて労働の機構の根本的変革を作り出すための闘争や抗議の形態について、議論がなされていました。なぜなら、「家事労働への賃金」は目的であるだけでなく、むしろ、ものの生産に対して、個人との再生産を優先して、発展の用語に対抗しうる新たな展望であったからです。したがって、この時代——七〇年代——に書かれたフェミニストの論文は行動的目的性に、そして同時に理論的運動的議論に密接に結びついていたのです。

一方、家父長制についての議論は、早くに陰に隠れてしまうか、あるいはイタリア・フェミニズムのもうひとつの精神である、アメリカ合衆国起源の「自我の確立」として存在していました。

ともあれ家事労働への賃金の領域をめぐる理論的・実践的討論は、さらに国際的レベルで広がっていました。なぜなら七〇年代初め以後、その組織的・理論的活動に課せられた課題の次元は、世界中でますます広がっていましたからです。

5. あなたが現在関心をもつておられる問題についてお話し下さい。

私の当時の関心と現在のそれとの間に中断はないと思います。基本的に、さまざまな問題に対する理論的アプローチの連続性を保ってきたと思います。私は、現在の発展の内部で女性の問題が決定的に重大なものであり続ける国際的議論の状況の中で活動しています。したがって私たちが生きている現在の発展の形態から別の形態への移行を貢献することに、理論的実践的にどうやって貢献すればいいのかを考えています。それによって女性、および現在の発展によって多くの意識において生活がますます貧困になっていくばかりであるすべての人々のおかれただけでなく、環境の破壊、貧困、人類に対する様々な形態の犯罪の拡大、これらはすべて、私たちが生きている現在の発展の局面をますます特徴づけています。そしてこれらのことすべてが私にとっては調査、研究の領域なのです。それらはすべてが密接に結びついています。

私はまた、女性の人の権利の領域でも活動しています。私はパドヴァの人権専門校で教鞭をとっています。——人権というものはたしかに解決ではありませんが、しかし女性の組織や運動がそれを用いることができるならば、くりかえし強力な手段となりうるからです。

ありがとうございました。

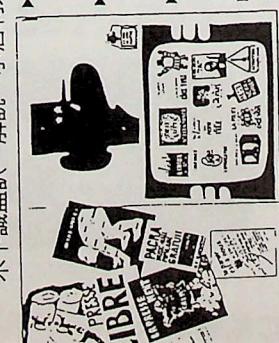
## アンテルナシオナル・シチュアシオニスト第1回配本

定価4120円(税込)

### ① 状況の構築へ

#### シチュアシオニスト・インター・ショナルの創設

木下誠監訳・解説・小倉利丸・杉村昌昭・木下誠



1988年から1989年にかけて刊行された「アンテルナシオナル・シチュアシオニスト」は全文を白分冊に分けて刊行。美術、映画、文学、建築、新記述画、日常生活、広告、政治、精神、思想など多岐にわたる本籍は、現代の思想的フローリング・マティックの宝庫である。

左裏表紙: 60年目の賛同者による生誕・歿死文集の紹介で、60年目の賛同者によるヨーロッパの思想家が浮かび上がる。  
右裏表紙: 気鋭の批評Rチームで、4ヵ月に1冊、2年で完結する。

●6月刊

#### まだ「フェミニズム」がなかったたり

1970年代、女を生きる  
加納実紀代著 税込2400円

リブで幕を開けた70年代は、女たちにとどまんな時代だったのか。

くこと、子育て、母性、男社会を問うながら、90年代の女の生き方を問う。

#### 力シナナニ

湯浅克衛民地小説集

植民地朝鮮と内地の間で歴史を生きた作家・湯浅克衛の全貌を明らかにする最初の作品集。池田浩士編集・解説。星内容見本・10300円  
●5月刊

東京都文京区本郷2-30-14(会員: イザラ書房)

☎03-3818-3756 FAX03-3818-8676

●新刊  
学校といふ交差点

岡村達也・尾崎ムゲン編著 税込2730円  
学校をオープンなものにしてよ。人間であることの自由な精神と生き方を損なわないにせよ。フリースクールや塾、子どもたちの権利条約、国際化など、本書には学校をめぐって論じられるべき核心がある。

#### 「無党派」という党派性

天野恵一著 税込2575円

運動の体験を思想化する! 我々はどうだけこのことに自覺的であつたからか。「インパクト」誌連載脚本から注目を集めた、著者横年のライフワーク遂に刊行。